

人はなぜウェブ日記・ウェブログを書き続けるのか(1)

三浦 麻子(Asako Miura)・山下 清美(Kiyomi Yamashita)
(神戸学院大学人文学部・専修大学ネットワーク情報学部)

ウェブ日記・ウェブログ・継続意向・自己開示・情報提供

問題

本研究は、インターネット・メディアの一形態であるワールド・ワイド・ウェブ(World Wide Web; 以下ウェブ)上で、個人を作者とするコンテンツのうち、もっとも頻繁に更新され、またコミュニケーション志向が強い「ウェブ日記」と「ウェブログ」に関して、その作者を対象とした質問紙調査をおこなったものである。調査全体の目的は、先に川浦・山下・川上(1999)によっておこなわれたウェブ日記作者を対象とした質問紙調査から得られた、ウェブ日記の継続意向における自己開示とその効用に関するモデルをもとに、情報提供に関する視点を加えた新たなモデルの構築をおこない、質問紙調査によって得られたデータによってその妥当性を検証することである。特に本発表では、調査の概要および基本的集計について報告する。

個人ウェブサイトとウェブ日記・ブログ 個人がウェブで能動的に情報の送り手となる際にはさまざまな形態があるが、もっとも主要な手段がウェブサイト(いわゆる「ホームページ」)の作成・公開である。ウェブ上の個人コンテンツには大別して「自分語り」と「他者との交流」の2パターンがあるが、初期から(少なくとも日本において)個人ウェブサイトの中心的なコンテンツであるウェブ日記は、両者の特徴を併せもった融合点のような存在である。

ウェブ日記を書く人々のその実態や書かれる理由、またウェブ日記がCMCとしてどのような役割を果たしているかを実証的に検討した研究がKawaura, Kawakami, and Yamashita(1998)と川浦ら(1999)である。これらの研究では、ウェブ日記というコンテンツは、単なる「自分語り」への欲求の具現化だというわけではなく、そこには活発なコミュニケーションへの希求が存在することが示唆されている。つまり、ウェブ日記は、作成者の語りの中に他者の参加を積極的に許容し、そこに明示的にパーソナル・コミュニケーション

が成立している場合が多いコンテンツである。

このように先行研究は、読者へと開いた空間での「自分語り」のコンテンツとしてウェブ日記を捉え、自己開示の心理的効用が継続意向に影響するという因果モデルを示した。前回調査から5年以上が経過し、インターネットがますますそのコミュニケーション・メディアとしての成熟の度合いを増す中で、この種のコンテンツに、一つの新たな潮流が加わりつつある。それがウェブログ(weblog)である。ウェブログは、作成者によって何らかの情報へのリンクが日々追加されていくことで運営され、その情報ラインアップがサイトの全体的な雰囲気を形成し、その記事に対して作成者と読者たちコメントが交換されるという参加型のコンテンツである。ウェブログはウェブ日記とは異なるコンテンツであるとする向きもあるが、著者らは「作者である個人が経験・見聞した事実や、それに対する自分のコメントをコンテンツとして記録・公開する」という意味においてウェブ日記とウェブログは基本的に差異がないと考える。両者の異なる点は書き手の志向性であり、ウェブ日記は作者の語りが主に自己開示とそこから生まれる相互交流を志向しているのに対して、ウェブログでは積極的な情報提供による知識共有への志向性が顕著である。後者は先行研究では検討されていない新しい視点である。

ウェブログというコンテンツが、従来のウェブ日記と融合し、個人のウェブコンテンツを核とした電子コミュニティにより多彩なあり方を提供しはじめた現在、先行研究に情報提供に関する視点を加えた新たなモデルの構築をおこなうことは、個人のウェブ行動に関するより統合的な理解につながるものと考えられる。

調査

対象者 インターネット上のウェブ日記サービス「はてなダイアリー」(URL: <http://d.hatena.ne.jp/>)を利用してウェブ上で日記コンテンツを作成・公開している個人

を対象とした全数調査をおこなった。「はてなダイアリー」は、2003年3月に開始されたウェブ日記・ウェブログ作成サービスであり、同種のサービスの中で、調査実施時点でもっとも多くの利用者を集めていたものである(2004年1月度時点の利用者(日記・ブログ作成者+閲覧者の合計)202万人・ネットレイティングス調査による)。「はてなダイアリー」は、その名が示すとおり主にウェブ日記コンテンツ作成のサポートをおこなうものであるが、キーワードリンクやカテゴリによるトピックの分類がおこなえるので、ウェブログ的な要素をコンテンツに反映させることが可能である。つまり書き手の志向により、ウェブ日記的/ウェブログ的コンテンツの両方が実現できるサービスである。

調査の実施 調査は2004年3月1日から3月14日の2週間にわたって実施された。「はてなダイアリー」を運営している株式会社はてなの協力を得て、登録されたIDを対象として電子メールによって送信されている「お知らせ」メールマガジン質問紙調査の趣旨と回答する際にアクセスするウェブページのURLを告知し、協力を依頼した。調査開始時点で「はてなダイアリー」における日記・ブログ数は28541件である。

質問紙への回答は合計1434件得られた。回答漏れのあるもの、重複回答と見なされるもの(例:同一IPアドレスからの連続回答)や回答に不備のある者を削除し、最終的に分析の対象となったデータは1142件であった。

質問項目 (1)ウェブ日記・ブログ執筆状況 (2)同・執筆動機や効用 (3)パーソナリティ・個人特性 (4)ツール等の利用経験 (5)回答者の基本的属性について問うた。

結果

回答者の性・年代別クロス表をTable1に示す。回答者の分布は、はてなダイアリー利用者全体の分布とほぼ同様であり、今回の調査が、はてなダイアリー利用者(ひいてはウェブ日記・ウェブログの書き手)をよく代表していることがわかる。

Table2は回答者たちがウェブ日記・ブログを書き始めた年代の推移を男女別に示したものである。男女でやや開始年の分布に違いが見られることがわかる。

次に、執筆開始年に基づいて回答者を「前期:初期ウェブ日記ブーム世代(1999年以前)」250件、「中期:ウェブ日記レンタルサイトブーム世代(2000-2002)」314件、「後期:ウェブログブーム世代(2003-)」578件に3分割した。この分類にしたがって、執筆時の匿名性を男女別に示したのがTable3である。すべての世代において、男性より女性の方が自身の素性が明らかにならないよう配慮しており、匿名性高い環境で執筆していることがわかる。特に「ウェブ日記レンタルサイトブーム世代(2000-2002)」の女性で匿名/実名を隠すハンドルで執筆している回答者が多いことが目立つ。ウェブ日記・ブログの変容の流れを象徴している結果である。

参考文献

- Kawaura, Y., Kawakami Y., and Yamashita, K. 1998
Keeping a diary in cyberspace, Japanese Psychological Research, **40**, 234-245.
川浦康至・山下清美・川上善郎 1999 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか 社会心理学研究, **14**, 133-143.

Table1 回答者の性・年代別クロス表(カッコ内%)

性別	年代					合計
	10	20	30	40	50	
男性	84 (10.73)	407 (51.98)	232 (29.63)	46 (5.87)	14 (1.79)	783 (100)
女性	35 (9.75)	195 (54.32)	107 (29.81)	21 (5.85)	1 (0.28)	359 (100)
合計	119 (10.42)	602 (52.71)	339 (29.68)	67 (5.87)	15 (1.31)	1142 (100)

Table3 執筆開始時期による執筆時の匿名性(%)

執筆時の匿名性	前期		中期		後期	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
匿名	3.68	5.75	4.59	3.39	7.78	9.09
ハンドル/実名隠す	44.79	59.77	46.94	73.73	49.53	61.04
ハンドル/実名隠さな	34.36	21.84	32.14	20.34	29.95	22.73
実名	17.18	12.64	16.33	2.54	12.74	7.14
サンプル数	163	87	196	118	424	154

Table2 ウェブ日記・ブログを書き始めた年代の男女別推移(%)

性別	日記・ブログの開始年											
	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	合計
男性	0.13	0.90	2.81	3.32	5.63	7.93	7.54	8.06	9.46	32.23	21.99	100.00
女性	0.28	0.00	1.40	4.47	7.26	10.61	13.97	8.94	10.06	22.91	20.11	100.00